

短 報

ヒト口蓋扁桃から発見された四吻目 条虫幼虫について

菊地由生子* 武内利直*
神谷正男† 小崎秀夫‡

(昭和56年4月7日 受領)

Key words: human palatine tonsil, *Nybelinia surmenicola*

北方系海産魚類には、種々の線虫、条虫の幼虫が寄生していることが知られている。一方、日本人の食習慣として魚類の生食があり、幼虫の寄生している魚類を摂取すると、ときに人体に寄生し、臨床症状を惹起する。北海道方面では *Anisakis*, *Terranova* などの幼虫による larva migrans としての消化管アニサキス症がよく知られている。

今回、我々はスルメイカ生食後、これに寄生していたと思われる Tentaculariidae Poche, 1926 の *Nybelinia surmenicola* Okada in Dollfus, 1929 の幼虫とすべきものが、ヒトの咽頭に寄生し、臨床症状を示した症例を経験したので報告する。

患者：40歳男子。職業 採鮎夫。住所 北海道余市郡余市町。

臨床経過と現症：1980年9月24日昼食時、イカ刺身を食べたが、左咽頭附近に異物感を覚え、3時間後に余市町内某耳鼻咽喉科医院を受診した。診察すると、左口蓋扁桃上窩に白い索状物が附着していた。この索状物は静止しており、自発運動などの生物学的反応は観察出来なかった。鉗子で引くと、その一端がかなり強く固着して抵抗があつたが、引き離して採取した。扁桃自体には、肉眼的に著変はなかつた。

寄生虫学的検索：索状物は約7×2mmの白色透明、紡錘形の異物であつた。これを10%ホルマリン液で固定したのち、長軸と平行のパラフィン連続切片を作成して、ヘマトキシリン・エオシンで染色し、鏡検した。標本は、かなりよく保存された虫体で、採取の段階では恐

らく生きていたと想像される。その最大径切片では、吻を除く全長は、6.87×1.65mmであつた。写真1に示す如く、頭節は6.12×1.62mmあり、その先端に位置して吻鉤をもつが、吻自体は採取の段階で破壊されている。頭節内に2本の吻鞘が体軸と平行に走り、長さ1.05mmのパナナ状に屈曲した吻囊に連るのが観察される。この吻鞘は、吻囊に近い部位で屈曲していることが連続切

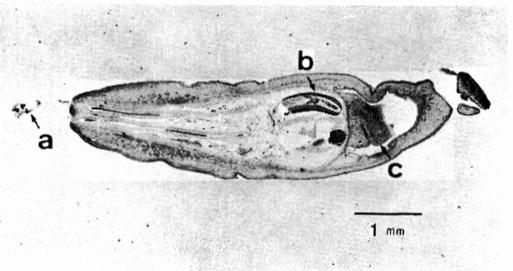


写真1 虫体縦断
吻(a)、吻囊(b)、体節原基(c)

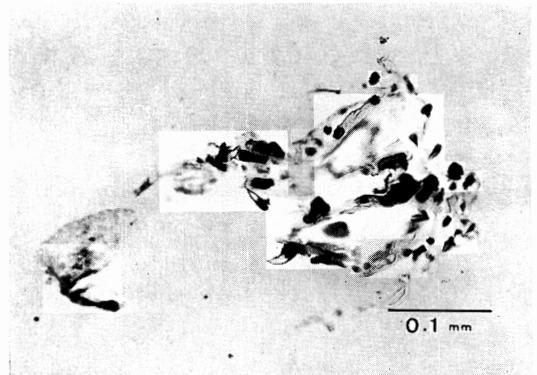


写真2 吻における吻鉤を示す

* 北海道大学医学部第一病理学講座

† 北海道大学獣医学部寄生虫学講座

‡ 市立札幌病院耳鼻咽喉科

片で観察された。

吻自体は破壊されているため、その数や長さなどの形態及び吻鉤の数、配列については確認できなかった。いくつか観察された鉤の長さは0.025~0.042mmで、根底は0.017~0.021mmであった(写真2)。吸葉については、パラフィン切片のため、明らかにできなかった。体実質には石灰小体がみとめられた。

考 察

この虫体は上記の如く、頭節、体節をそなえ、石灰小体もみとめる条虫の一種であると考えられる(岩田, 1938)。我々の虫体は、パラフィン切片による観察であり、虫体の計測値はやや縮小していると考えられ、又、外表所見も観察することは出来なかつた。しかし、Bykhovskaya(1962)、嶋津(1975)、Zhukov(1960)らの報告と対照考察してみると Trypanorhyncha; Tentaculariidae に属する *Nybelinia surmenicola* Okada in Dollfus, 1929に最も近いと考えられる。即ち、頭節の大きさは嶋津(1975)によると7.2~10.2×2.6~3.1mmで、吻鉤はバラの棘状で、長さ0.042~0.047mm、根底の長さ0.033~0.039mmが最大であり、我々の虫体のそれに類似している。又、吻嚢はバナナ状に屈曲して太く、吸葉と重なつていて、吻鞘は吻嚢の近くで屈曲している点なども一致している。しかし、吻の長さや数、吻鉤の配列と数については、我々の例では破壊されていて比較できなかった。又、市原ら(1965)の報告した Tentaculariidae のうちの *Tentacularia coryphaenae* Bosc, 1802と比較すると、吻嚢の位置、形態、更に吻鞘の屈曲性が異なり、頭節が我々の例ではやや小さい点などから、*Nybelinia* により類似性を求めることが出来る。更に、前述の如く、患者の訴えによれば、患者は生イカの刺身を、発症の3時間前に食しており、北方海域で捕獲されるスルメイカに、この種の幼虫が、中間宿主として寄生することが、嶋津(1975)により記載されている点からも、*Nybelinia surmenicola* Okada in Dollfus, 1929である可能性が高い。

我々が、今回観察した例は、幼虫が人体に寄生して障害をおこした例であるが、未だこのような症例は報告されていない。ただし、扁桃局所の組織変化を観察出来なかつた。北方海域魚類の Tentaculariidae 寄生頻度が、かなり高率で、しかも魚類生食の習慣のある我国では、

今後も同様の症例に相遇する可能性があると考え、報告した。

ま と め

1. 北海道余市郡余市町において、1980年9月、刺身イカ生食後3時間で、左口蓋扁桃上窩に附着寄生していた虫体を発見、寄生虫学的に検索した。

2. ホルマリン固定、パラフィン連続切片による観察では、頭節の長さ、吻嚢の形や大きさ、吻鉤の形などの特徴から Tentaculariidae の *Nybelinia surmenicola* Okada in Dollfus, 1929に最も近似している。

謝 辞

稿を終るにあたり、終始、貴重な御意見と御指導をいただきました北大獣医学部大林正土教授に深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) Bykhovskaya-Pavlovskaya, I. E., Gusev, A. V., Dubinina, M. N., Izyumova, N. A., Smirnova, T. S., Sokolovskaya, I. L., Shtein, G. A., Shulman, S. S. and Epshtein, V. M. (1962): Key to parasites of fresh-water fish of the USSR, Izdat. Acad. Nauk SSSR, Moskva-Leningrad, 434-437(in Russian).
佐野徳夫(1979): 魚類寄生虫. 扁形動物編, 恒星社厚生閣, 東京, 396-399.
- 2) 市原醇郎・亀谷俊也・加藤和子・木原緑(1965): カツオの体腔に見出される条虫 *Tentacularia* の幼虫について. 目黒寄生虫館月報(72-73), 2-4.
- 3) 岩田正俊(1938): 条虫綱. 日本動物分類, 第4巻, 第3編, 岡田弥一郎・内田亨・江崎儀三編, 第1版, 66-70頁, 三省堂, 東京.
- 4) 嶋津 武(1975): ニベリン条虫 *Nybelinia surmenicola* の成虫と生活史について. 日水誌, 41, 823-830.
- 5) Yamaguti, S. (1959): Systema Helminthum, Vol. II, Interscience Publishers. I. N. C., New York and London, 105-114.
- 6) Zhukov, E. V. (1960): Endoparasitic worms of the fishes in the sea of Japan and South-Kuril Shallow-waters. Trudy Zoolog. Inst. Acad. Nauk SSSR, 28, 3-144.

Research Note

Abstract

TRYPANORHYNCHIID CESTODE LARVA FOUND ON THE
HUMAN PALATINE TONSIL

YUKO KIKUCHI, TOSHINAO TAKENOUCI,

(Department of pathology, Hokkaido University School of Medicine, Sapporo, Hokkaido)

MASAO KAMIYA

(Department of Parasitology, Faculty of Veterinary Medicine,
Hokkaido University, Sapporo, Hokkaido)

AND

HIDEO OZAKI

(Department of Otorhinolaryngology, Sapporo Municipal Hospital, Sapporo, Hokkaido)

A 40 year-old male at Yoichi district on the northern coast of the sea of Japan, Hokkaido, Japan, had a pain on his pharynx three hours after taking raw fresh of a squid, *Omastrephes solani pacificus*. A trypanorhynchiid cestode larva, ca 7×2 mm, was found tightly attaching itself with one end of its body to his left palatine tonsil.

The larva was considered to be *Nybelinia surmenicola* Okada in Dollfus, 1929 (Tentaculariidae).